

例会 作品 帳

◎平成二十六年四月二十五日(第二十三回)

(佐藤 亮照)

オカリナの音色とともに変わりゆくホームの集いゆるむ表情
十七年共に育ちし猫遊きて家族のささえ一つ消え去る

(佐藤 志亮)

初雪に小さな足あと続くみち幼き笑顔が冬の味方
あと一步「ベストをつくせ」と背中押す一隅照らさん他が為にごと
雨つづき喜ぶ草木香りたつ生命の季節ありがたきかな

宵の春霞城彩る花桜見上げる空にフラワーシャワー
背の君にたわむる霞城の花吹雪歳久しくと願うこの日を
同じ時カレーに思い馳せており共に笑えばひぐらしも鳴く
夏の夜半寝台列車は神の地へ数多の思い寄り添うごとく

(黒沼 貞志)

ジャグジーの泡に身体を包まれて今朝の諍い^{うたかた}泡沫と消ゆ
診察の母に付き添う待合で諭す娘のことば優しき
一列に電車の座席に座り居る老いも若きもスマホに耽る
家住期を過ぎせしこの地訪れて三日過ぎせど馴染めぬ我居り

時忘れ友と見えて話し込みグラスの汗が伝い流るる
突然の地震に停まる新幹線暗闇の中にスマホが蠢く

サハラの大事件で遊きたるわが友のその名が判りし指輪の記憶
含羞の笑みを探してハレの日の髭そる顔に老いを見る朝
娘より生菓子届く父の日に薄茶をたてる午後のひとつとき

雪溪の冷気を纏い吹き上ぐる風に癒され背の汗も引く
錦繡が下界に広がる尾根に立ち瞬き忘れ言葉を忘れ(＊)

木道の先に広がる錦繡は身体を癒す力となりぬ(＊)

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽む会)

尾根の道実如現わる崖もみじ雲の切れ間はカーテンコール (＊)

ジューンベリー白き花々咲き満ちて想い描きし朝食のジャム (＊)

水面まで届かんばかりに咲き誇る枝ぶり豊かな城址の桜 (＊)

連れ立ちて桜を愛てる老いの春会話弾めば記憶に残らん (＊)

桜花咲く静けさの中の弓道場一射を待つ間にカメラは連写 (＊)

柔らかき光を浴びて芽吹くいこばえ薬次代いこばえに繋ぐ木々の営み (＊)

一輪の流れ着きたる雪椿花卉に憶ゆる堪えぬきし冬 (＊)

平日に犬と連れだつ散歩道風に乗りくる郭公のこえ (＊)

昼中の丘の木陰に休んでも携帯離せぬ今の世の中の (＊)

アリウムが空にすつくと咲き居りて思わず我も姿勢を伸ばす (＊)

里山の祭りの旗を見るようにわが家の庭に咲くジギタリス (＊)

(＊) … 「写真短歌」

(寺崎 秀也)

クールビズサラリーマンは軽装でビール片手に夏を乗り切る

山形の夏を彩る踊り手の掛け声響く花笠まつり

盂蘭盆会精霊棚をこしらえて提灯ともし御霊を祀る

善光寺七年振りの御開帳回向柱に祈りを込めて

護摩堂で祈願太鼓の乱れ打ち撥を持つ手に力がこもる

月いちでお寺に集う此のご縁有難きかな遊縁の衆

(長谷川美喜男)

馬見ヶ崎桜トンネルドライブす天の川なるテールのランプ

一周忌父の遺品の「道」の書にありほのかに匂う墨の残り香

子等巣立ち夫婦ふたりの食卓は脂肪を減らし野菜が並ぶ

空梅雨の雨が恋しとあじさいは参道脇にかわき咲きたり

五月空日足は延びて放課後の缶けり遊ぶ子等の夕暮れ

円安に日本経済助けられ株高か躍る朝刊見出し

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

ベトナムの息子(こ)より届きし洋蘭のあわい香りに南国思ふ

猛暑日はステテコ姿の縁側でビール片手にただちやをつまむ

朝顔のこぼれし種がぐんぐんとつるは伸びゆく初夏の陽受けて

息子らに若い若いと乗せられて居合を始め一〇年過ぎぬ

九十を間近に遊きし父親を看取りて思ふ晴れ晴れの感

梅雨時の食卓並ぶさくらんぼつまみ食いで夏を味わう

誰だろう毎年届く年賀状思い出せずに返信送る

梅雨入りし喜び遊ぶかわず等がつくる川面の波紋を見やる

錦秋のパステル色の木々見上げひと碗の茶にやすらぎ憶ゆ

還暦を迎えて思う我が人生酸いも甘いもなつかしき日々

厳寒のモスクワリバー凍りつき銀河をはしる小鳥かな

茅葺きの屋根より抜きしワラの穂をけなげに運ぶすずめの羽音